『聖書翻訳研究』31（2008）51-63

ユダ書・第二ペトロ書の翻訳について
——新共同訳を中心に——

辻　学

序　訳文検討の視点

本稿の目的は，新共同訳聖書のユダの手紙（以下ユダ書）とペトロの手紙二（以下IIペトロ書）を取り上げ，その訳文を検討することである[1]。

よく知られているように，ユダ書とIIペトロ書は相互に，極めてよく似た表現や，重複する語彙を多く含んでいる。そしてこの現象は，IIペトロ書の著者がユダ書を利用したために生じたもの（文献依存）だと考えて間違いない[2]。

そこで本稿では，次の2つの視点から，新共同訳の訳文検討を行うことにしたい。

1．ユダ書とIIペトロ書との間にある対応関係が見て取れるような訳語が用いられているか。新約聖書学を専門としない人が読んでも，両者の間に語句上の一致や類似が多いことがわかるよう，同じ単語には可能な限り，すなわち文脈上無理がない限り同じ訳語を用いることが望ましい。そのことが意識されているだろうか。

2．ユダ書とIIペトロ書の釈義を行う上で問題となる箇所，すなわち解釈が分かれる箇所について，それぞれ新共同訳はどのような判断を下しているか。

I. 文献依存が見られる箇所の訳し方

まず第1の点から見ていくことにしよう。

ユダ書とIIペトロ書との間には，以下のような対応関係が見られる[3]。

(1)　ユダ2＝IIペトロ1:2　　(8)　ユダ10＝IIペトロ2:12

1　本稿は，2005年10月10日に日本聖書協会7階会議室で行われた第31回日本聖書翻訳研究会例会における研究発表に基づいている。

2　小林稔「ペトロの手紙二」『新版総説新約聖書』日本キリスト教団出版局，2003年，386-391頁，また拙稿「ペトロの手紙二」『新共同訳新約聖書略解』日本基督教団出版局，2000年，698-705頁も参照。

3　U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament* (UTB 1830), Göttingen ⁴2002, 473-474による。

(2) ユダ4＝ Ⅱペトロ2:1-3　　(9) ユダ11＝Ⅱペトロ2:15
(3) ユダ5a＝Ⅱペトロ1:12　　(10) ユダ12 ＝Ⅱペトロ2:13
(4) ユダ6＝ Ⅱペトロ2:4　　(11) ユダ12-13＝Ⅱペトロ2:17
(5) ユダ7＝ Ⅱペトロ2:6,10a　　(12) ユダ16 ＝Ⅱペトロ2:18
(6) ユダ8＝ Ⅱペトロ2:10b　　(13) ユダ17 ＝Ⅱペトロ3:2
(7) ユダ9＝ Ⅱペトロ2:11　　(14) ユダ18 ＝Ⅱペトロ3:3

このうち，訳語選定に問題があると思われるのは次の5箇所である。

① ユダ8＝Ⅱペトロ2:10b
ユダ「栄光ある者たちを<u>あざける</u>のです」
(δόξας δὲ βλασφημοῦσιν)
Ⅱペトロ「栄光ある者たちを<u>そしって</u>はばかりません」
(δόξας οὐ τρέμουσιν βλασφημοῦντες)

同じギリシア語の動詞　βλασφημέωに異なる訳語（あざける／そしる）が充てられている。同じ現象はユダ10＝Ⅱペトロ　2:12にも見られる。動詞 βλασφημέω　を「ののしり」(ユダ10)，「そしる」（Ⅱペトロ2:12）と訳しているのである。さらにユダ書の場合，9節の βλασφημίαςには「ののしる」という別の訳語も用いられている。つまりユダ書では，βλασφημέῶ βλασφημίαに，「あざける」（8節）→「ののしる」（9,10節）という別の訳語を充てていることになる。これでは，8-10節の意味上のつながりがわかりにくくなってしまう。また，Ⅱペトロ書との対応関係も曖らされてしまうので，「ののしる」か「そしる」に揃えたほうが良い。岩波書店版『新約聖書Ⅴ』（以下岩波訳）のように「冒瀆する」で統一することも考えられよう。異なる訳語を用いる文脈上の必然性がないのだから，同種の原語が用いられていることが読者にわかる訳語の選定が望ましい[4]。

4　もちろん，いかなる場合にも同じ原語には同じ訳語を充てるべきだというのではない。訳語の選定に際しては文脈も当然考慮される必要がある。しかし，文脈上の無理がない限り，この原則は重視されるべきで，ここで取り上げている箇所の場合は，同じ訳語を用いて何ら差し支えないはずである（研究会での発表時に橋本滋男氏から出された質問に対して）。

② ユダ10＝Ⅱペトロ2:12
ユダ「<u>分別</u>のない動物のように」
(ὡς τὰ ἄλογα ζῷα)
Ⅱペトロ「<u>理性</u>のない動物」
(ως ἄλογα ζῷά)

下線を引いた部分の原語はいずれも　ἄλογα　ζῷαである。これを「分別」「理性」と訳し分ける必要はなく，どちらかに統一して何ら差し支えないはずである。両文書の対応関係を意識せずに訳出がなされたか，あるいはユダ書とⅡペトロ書の訳者はそれぞれ別の人物なのかもしれない（新共同訳では，各文書の訳者が明らかにされていない）。

③ ユダ12＝Ⅱペトロ2:13
ユダ「厚かましく<u>食事に割り込み</u>」
(συνευωχούμενοι ἀφόβως)
Ⅱペトロ「あなたがたと<u>宴席に連なる</u>とき」
(συνευωχούμενοι ὑμῖν)

動詞 συνευωχέομαιが用いられているのは新約でこの2箇所だけであり，ここからも両文書の依存関係が窺われるのだが，訳文にはそれが反映していない。συνευωχέομαι　の意味は「共にごちそうを食べる，共に宴会をする」[5]だから，ユダ12の「食事に割り込（む）」は意訳し過ぎている。Ⅱペトロ書のほうがまだ原義に近い。岩波訳は「同席する」としている。ユダ12の訳は論敵を教会の外部から入ってきた人間とする（4節「ある者たち……が，ひそかに紛れ込んで来て」）仮説に基づいているが，4節の表現が実態を反映したものなのか，それとも敵対者を非難するレトリックなのかは議論の余地がある。いずれにしても，あまりに原義を離れた訳語は避けたほうが良い。

5　W. Bauer, *Griechisch-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6. Aufl. hg. von K. Aland und B. Aland, Berlin/New York [6]1988, 1573: "zusammen schmausen, gemeinsame Gelage halten".

④ ユダ13＝Ⅱペトロ2:17

ユダ「永遠に暗闇が待ちもうける迷い星」

（ἀστέρες πλανῆται οἷς ὁ ζόφος τοῦ σκότους εἰς αἰῶνα τετήρηται）

Ⅱペトロ「干上がった泉，嵐に吹き払われる霧であって，彼らには深い暗闇が用意されているのです」

（πηγαὶ ἄνυδροι καὶ ὁμίχλαι ὑπὸ λαίλαπος ἐλαυνόμεναι, οἷς ὁ ζόφος τοῦ σκότους τετήρηται）

ここでも同じ原語に異なる訳語が充てられている。ὁ ζόφος τοῦ σκότουςは，直訳すれば「暗闇の闇」で，闇を強調したヘブライ語的表現である[6]。これをユダ書は単に「暗闇」としている一方，Ⅱペトロ書は，強調を表す意味で「深い暗闇」としており，こちらのほうがより適切な訳語と言えよう。

また，τετήρηταιにも「待ちもうける」「用意されている」という異なる訳語が充てられているが，これも同じ訳語を充てることに何ら差し障りはないはずである。あまり馴染みのない「待ちもうける」よりも，「用意されている」という平易な訳語のほうが理解されやすいように思う。

⑤ ユダ18＝Ⅱペトロ3:3

ユダ「あざける者どもが現れ，不信心な欲望のままにふるまう」

（ἔσονται ἐμπαῖκται κατὰ τὰς ἑαυτῶν ἐπιθυμίας πορευόμενοι τῶν ἀσεβειῶν）

Ⅱペトロ「欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ，あざけって」

（ἐν∆ ἐμπαιγμονῇ ἐμπαῖκται κατὰ τὰς ἰδίας ἐπιθυμίας αὐτῶν πορευόμενοι）

ここでも，同じ原語に異なる訳語が充てられている。「あざける者ども」（ユダ）と「あざける者たち」（Ⅱペトロ）の違いはご愛嬌のうちだが，「欲望のまま」（ユダ）と「欲望の赴くまま」（Ⅱペトロ），また「ふるまう」（ユダ）と「生活する」（Ⅱペトロ）の区別はまったく不要で，訳文の一致に配慮がほしい。

以上の５箇所から導き出せるのは，次の３点である。

1. 新共同訳聖書は，ユダ書とⅡペトロ書が持つ語句上の対応関係を意識して訳してはいない。同じ原語に異なる訳語を充てている場合が目立つ。
2. その場合，Ⅱペトロ書の採用している訳語のほうが適切と思われる場合がある一方，ユダ書で用いられている訳語はあまり適当とは思われない。
3. ユダ書では，8–10節に見られるように，同じ文書の中でも原語と訳語間の対応関係が定まっていない場合も見られる。

上記３点はいずれも，原語と訳語間の対応関係がしっかりと定まっていないゆえの問題なのだが，この難点は，旧共同訳聖書（＝『新約聖書 共同訳』1978年）の影響によるものである。旧共同訳は，原語と訳語の対応関係よりも，そのつどの文脈における「意味」を重視した翻訳になっている[7]。上述の箇所はいずれも，旧共同訳の訳語をそのまま受け継いでいる。翻訳方針を一新したはずの新共同訳聖書[8]の中で，ユダ書とⅡペトロ書の場合は，旧共同訳の翻訳方針が，ここで指摘したような形で生き残ったわけである。

Ⅱ. 釈義上の難点における翻訳

次に，序の２で指摘した問題，すなわち，ユダ書・Ⅱペトロ書の釈義を行う上で問題となる箇所，あるいは解釈が分かれる箇所について，それぞれ新共同訳はどのような判断を下しているかという点について検討することにしよう。

１．ユダ書

（1）7節

6 "Der Hebraismus »die Dunkelheit der Finsternis« intensiviert die Finsternis" (A. Vögtle, *Der Judasbrief, der 2. Petrusbrief* [EKK XXII], Solothurn u. Düsseldorf/ Neukirchen-Vluyn 1994, 69 Anm. 37).

7 いわゆる「動的等価接近」（dynamic-equivalence approach）による翻訳。旧共同訳が採っているこの翻訳方針については，田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房，1997年，584–586および657–661頁参照。

8 新共同訳聖書の「序文」によれば，翻訳の基本方針は「できるかぎり，原文を完全に再現するために，忠実であり，正確であること」であり，それは「1978年に出版した，『新約聖書　共同訳』に対し，全く新しい翻訳といえるほどに大幅改訂の加えられたもの」なのである（「共同訳」＝旧共同訳の旧約聖書は出版されていない）。

（新共同訳）

「ソドムやゴモラ，またその周辺の町は，この天使たちと同じく，みだらな行いにふけり，不自然な肉の欲の満足を追い求めたので，永遠の火の罰を受け，見せしめにされています」。

（ὡς Σόδομα καὶ Γόμορρα καὶ αἱ περὶ αὐτὰς πόλεις τὸν ὅμοιον τρόπον τούτοις ἐκπορνεύσασαι καὶ ἀπελθοῦσαι ὀπίσω σαρκὸς ἑτέρας, πρόκειται δεῖγμα πυρὸς αἰωνίου δίκην ὑπέχουσαι）

下線部の原義は「他の肉の後を追い求めた」であるが，直訳ではその意味合いがはっきりしないので，様々な意訳が試みられている。

口語訳「不自然な肉欲に走った」
旧共同訳・フランシスコ会訳「不自然な肉欲の満足を追い求めた[9]」
新改訳「不自然な肉欲を追い求めた」
岩波訳（小林稔）「〔同性の〕異なる肉〔体〕を追い求めた」

岩波訳以外が共通して用いている「不自然な肉（の）欲」という訳語は，原語にない意味を読み込んでいるばかりか，何を表しているのかがわかりにくいという，極めて「不自然な」表現である。これならば，直訳のままにしておくほうがまだよい。

岩波訳は，ここにはっきりと同性愛の意味を見て取っている[10]。大多数の解釈者の見解は実際，岩波訳のように同性愛への言及と解するか，あるいは天使の（人間とは）「異なる肉体」との性行為と見るかの2つに大別される[11]。

9　フランシスコ会訳の旧版（分冊）では「不自然な肉を追い求めた」。

10　訳者（小林）は当該箇所の脚注　4でこのように解説している——普通には「不自然な肉の欲の満足」（新共同訳），男同士の同性愛と考えられている。

11　『新共同訳新約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局（1991年）の中でユダ書を担当している速水敏彦は，「これは異教の人々の間でよく行われていたホモ・セックスを意味すると一般に解釈されている」としながらも同時に，「〔6節の〕堕落した天使たちが人間の娘を追いまわした行為とソドムの町の人々が二人の天使を追及した行為との並行，すなわち，両者とも『異なった肉体』を追い求めている点に著者は注目していたのかもしれない」とも記している（479頁）。

詳細な論証はここでは省くが[12]，旧約聖書および同時代のユダヤ教文献を見る限り，ソドムと同性愛を結びつける考え方も，またソドムの人々と天使たちの「異なる肉体」の性交を問題とする考え方も，紀元1世紀後半において広まってはいなかった。したがって，ユダ7節の表現から読者が直ちにいずれかの意味合いを読み取れた可能性は極めて低い。

さらに文脈も，そのような解釈を支持しない。問題となっているのはむしろ，4節が問題としている性的放埒と神的権威への不従順であり，6–8節はその例示となっているのである。すなわち，ソドムとゴモラおよび周辺の町の人々は，神の権威を認めてこれに服従するのでなく，神に背いた生き方＝性的放埒に身を委ねる生き方をした。神を追い求めるのではなく，「他の（人間の）肉体を追い求めた」ことに，これらの町が神の罰を受けた原因があった，ということなのである。

したがって，同性愛を暗示するかのような，しかも曖昧な意訳をしている新共同訳の訳文は訂正するべきであろう。たとえ上に提示した説に賛成できないとしても，もっと直訳に近い訳文にする必要がある。新共同訳はここでも，旧共同訳をそのまま継承しているが，旧共同訳の「意味重視」主義が生き残った悪い例の見本である。

（2）22–23節

（新共同訳）

「疑いを抱いている人たちを憐れみなさい。
ほかの人たちを火の中から引き出して助けなさい。
また，ほかの人たちを用心しながら憐れみなさい。」

（Καὶ οὓς μὲν ἐλεᾶτε διακρινομένους,
οὓς δὲ σῴζετε ἐκ πυρὸς ἁρπάζοντες,
οὓς δὲ ἐλεᾶτε ἐν φόβῳ μισοῦντες）

この箇所は写本の読みが激しく分かれている[13]。新共同訳（および岩波訳，フラン

12　詳細は，拙稿「『ソドムの罪』は同性愛か——『他の肉を追い求める』（ユダ 7節）をめぐって」『関西学院大学キリスト教学研究』第2号（1998年）5–18頁を参照されたい。

13　詳細は B. M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, Stuttgart ²1994, 658–660を参照。この箇所についてのUBSの評価は｛C｝（= "[T]he Community had difficulty in deciding which variant to

シスコ会訳）は ℵ(*) A Ψ 33. 81 他の読み（ネストレ26=27版）に従っている[14]。それに対して，口語訳はBの読み（＝ネストレ25版）を採っている（新改訳も同じ）。

（口語訳）

「疑いを抱く人々があれば，彼らをあわれみ，火の中から引き出して救ってやりなさい。また，そのほかの人たちを，おそれの心をもって[15]あわれみなさい。」

（Καὶ οὓς μὲν ἐλεᾶτε διακρινομένους σῴζετε ἐκ πυρὸς ἁρπάζοντες,
οὓς δὲ ἐλεᾶτε ἐν φόβῳ μισοῦντες）

$\mathfrak{p}^{72}$の読みは次の通り。

「ある人々を火から救い出してやりなさい，
疑っている人々は，恐れのうちに（用心しつつ？）あわれみなさい。」

（οὓς μὲν ἐκ πυρὸς ἁρπάζατε,
διακρινομένους δὲ ἐλεεῖτε ἐν φόβω）

結論としてどの読みを採用するにせよ，確かさは極めて低いのだから，このような場合は脚注などで別の読みを併記したほうが良い。

2．IIペトロ書

（1）1章 1節

（新共同訳）

「わたしたちの神と救い主イエス・キリストの義によって，わたしたちと同じ尊い信仰を受けた人たちへ」

place in the Text" [ibid., 14])。

14　A C* 33.81他は ϵϛλεᾶτϵ の代りに ϵϛλέγχϵτϵ（「説得せよ」または「咎めよ」）と読む。なお旧共同訳は，一応３つの区分で訳しているが，訳し方が曖昧である――「疑いを抱いている人たちをあわれみなさい。火の中から人々を助け出してあげなさい。また，恐れの念をもって他の人たちをあわれみなさい」。これだと，2番目の「人々」と1番目の「疑いを抱いている人たち」は同一なのか別々なのかがわかりにくい。

15　ἐν φόβῳ を「用心しながら」（新共同訳）とするか「おそれの心をもって」（口語訳，フランシスコ会訳）とするかでも意味合いはかなり違ってくる。岩波訳は「恐れのうちに」。新改訳は「恐れを感じながら」。

（τοῖς ἰσότιμον ἡμῖν λαχοῦσιν πίστιν ἐν δικαιοσύνῃ τοῦ θεοῦ ἡμῶν καὶ σωτῆρος Ἰησοῦ Χριστοῦ）

「神」と「イエス・キリスト」を新共同訳は別の存在として訳しているが，原文では両者が一つの定冠詞で括られている。したがって，「神であり救い主であるイエス・キリスト」と訳しうるし（岩波訳やフランシスコ会訳，新改訳はそう訳している。口語訳は新共同訳と同じ）[16]，そのほうが文法的にも無理がない。

実際，イエス・キリストは　1世紀のキリスト教において既に神と同一化されていたのであり，そのことを示す典拠は，新約聖書の中に散見される（例，ヨハネ1:1，ヘブライ1:8–9[17]，イグナティオス・ローマ3:3「我らの神イエス・キリストは，父の中にあって，ますます明らかなのである」）。この箇所も同様に，イエス・キリストの神格化を示していると見られる。「（イエスの）神的な力」（1:3）という表現もこの理解と一致するし，1節の「神」をシナイ写本他が「主」と読み替えているのも，「神であるイエス・キリスト」という表現に引っかかりを覚えたからと考えられる。

興味深いことに旧共同訳はこの箇所を「わたしたちの神，救い主イエスス・キリストの正しさによって」と訳している。つまり新共同訳は，敢えて旧共同訳の理解を変更し，口語訳の理解に戻したわけである。しかもそれは，現代の日本語訳聖書における訳文の傾向に逆らった変更であった。

（2）2章 9節

（新共同訳）

「主は，信仰のあつい人を試練から救い出す一方，正しくない者たちを罰し，裁きの日まで閉じ込めておくべきだと考えておられます。」

（οἶδεν κύριος εὐσεβεῖς ἐκ πειρασμοῦ ῥύεσθαι, ἀδίκους δὲ εἰς ἡμέραν κρίσεως

16　同一視を支持するのは，フェクトレ(注6)，132–133頁，E. Fuchs/P. Reymond, *La deuxième épître de Saint Pierre, L'épître de Saint Jude* (CNT XIIIb), Genève 1988, 45; R. J. Bauckham, *Jude, 2 Peter* (WBC 50), Waco, TX 1983, 168-169 など。H. Paulsen, *Der Zweite Petrusbrief und Judasbrief* (KEK XII/2), Göttingen 1992, 104–105; H. Frankemölle, *1. und 2. Petrusbrief, Judasbrief* (NEB 18/20), Würzburg 1987, 89 などは，IIペトロ書の他の箇所ではキリストは神と呼ばれていないことを理由に，これに反対する。

17　「ヘブライ人への手紙は，御子を神と呼ぶことを少しもはばからない。その点では，パウロやヨハネよりもさらに大胆であると言えよう」（川村輝典『ヘブライ人への手紙』一麦出版社，2004年，59頁）。

κολαζομένους τηρεῖν)

この箇所で問題となるのは，正しくない者たちへの「罰」は今すでに下されるのか，それとも裁きの日になって初めて与えられるのかということなのだが，原文はその点が明確でない。

口語訳・旧共同訳・新共同訳は前者の解釈を採っている[18]。その論拠として挙げられるのは，①現在分詞 κολαζομένους（"being punished"）は厳密に言えば，「閉じ込めておく」（τηρεῖν）を修飾しており，この訳になる。②2:4の例との整合性（「神は，罪を犯した天使たちを容赦せず，暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し，裁きのために閉じ込められました」），の2点である。

他方，岩波訳は後者の解釈に立った翻訳になっている——「不義な人々はさばきの日に懲らしめられるべく監禁しておく」[19]。論拠となるのは，次の３点である。①この時代のギリシア語では未来分詞は稀だし，未来分詞受動形はさらに少ない（新約ではヘブライ3:5[λαληθησομένων]だけ）。未来の意味でも現在分詞で代用される場合が多い[20]。Ⅱペトロ3:11（λυομένων）でもそうしている。②2:4が語っているのは天使たちの「拘留」だが，κολάζω（罰する）は終末時に与えられる罰を指す用語であり（Ⅱクレメンス17:7，ヘルマス「譬」Ⅸ 18.2），「拘留」よりもずっと意味が強い[21]。③3:8–13の内容からすると，不義なる者たちに今すでに罰が下っているとは考えにくい。

2:4と2:9は，「（将来）の裁きのために（今）つないでいる」（4節）と，「（将来の）裁きの日に罰するべく（今）つないでいる」（9節）という形で対応していると読めるので，ここはやはり，脚注21に挙げた注解者たちと共に，後者のように解する

18　新改訳「さばきの日まで，懲罰のもとに置く」は「閉じ込める」を訳出していないが，同じ理解であろう。

19　ただし欄外注8では前者の訳の可能性も認めている。フランシスコ会訳「裁きの日に罰するために閉じこめる」も岩波訳と同じ理解。

20　例，ヨハネ17:20（περὶ τῶν πιστευόντων διὰ τοῦ λόγου αὐτῶν εἰς ἐμε）。J. H. Moulton/N. Turner, *A Grammar of New Testament Greek*, vol. 3: Syntax, Edinburgh 1963, 87; BDR §339.2αγ, 351; ボーカム（注16）254頁参照。

21　ボーカム（注16）254頁はさらに，ここで問題になっているのは，偽教師たちが（間近に迫った）終末時に裁かれ滅びることだから（2:3b参照），後者の意味が優先されると考える。フェクトレ（注6），193頁，フックス／レイモンド(注16)，88頁も同じ立場。他方パウルセン(注16)，135–136頁は，両者の意味を含みうるとする。

のが文脈に適っているだろう。新共同訳（および旧共同訳・口語訳・新改訳）の立場は，それとは逆になっている。もし前者の解釈を採り続けるのであれば，その論拠と共に，後者の解釈も可能なことを示す必要があると思う。

(3) 3章 6節

(新共同訳)

「[5b]地は神の言葉によって水を元として，また水によってできたのですが，[6]当時の世界は，その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。」（旧共同訳もほぼ同じ）

([5b] καὶ γῆ ἐξ ὕδατος καὶ δι' ὕδατος συνεστῶσα τῷ τοῦ θεοῦ λόγῳ, [6] δι' ὧν ὁ τότε κόσμος ὕδατι κατακλυσθεὶς ἀπώλετο.)

6節の「その水によって洪水に押し流されて」という表現は，類語反復（tautology）のように響くが，原文の「それらによって」(δι' ὧν) が何を指すかが明瞭でないため，諸訳の間でもこの部分の訳出には相違が見られる。

口語訳は「その時の世界は，御言により水でおおわれて滅んでしまった」としており，「それら」は5節のλόγῳを受けていると解している。しかし，「（神の）御言」ないしは「水」だと，いずれも単数なので，複数属格である代名詞 ὧνと文法的に整合しない[22]。かといって，5節で2回言及されている水を「上の水」と「下の水」と理解して文法的一致を図ったとしても，「水」だけが意味されているとすると，６節後半のὕδατιが完全に余分になってしまう。したがって，ὧνが受けているのは「神の言葉と水」だと考えざるを得ないであろう[23]。岩波訳はそのように訳している——「〔神のことばと水〕を通して，当時の世界は水により，〔すなわち〕洪水に見舞われて滅んだのであった」。

そのように解釈すれば，5–7節に一種のパラレリズムが成立することも，この判断を支持する。すなわち，

22　δι' ὧνという読みは写本の支持が弱い（P 69^{vid}. 945 t vg^{mss}）。

23　そのほかの解釈についてはボーカム（注16），298頁参照。ボーカムの他，パウルセン(注16)，161頁，フェクトレ(注6)，226頁，フックス／レイモンド(注16)，113頁もこれを「水と神の言葉」と解している。

（5節）神の言葉により水を手段として神は地を創った。

（6節）神の言葉により水を手段として神は当時の世界を破壊した。

（7節）神の言葉により火を手段として神は今の天地を破壊するだろう。

という論理のつながりが読み取れるわけである。したがってこの箇所は，新共同訳とは異なり，「（神の言葉により水を手段として）洪水で滅んだ」と解するのが適切である。

以上の考察からわかるのは，釈義上の意見が分かれる箇所において新共同訳が，主な注解書の見解とは異なる立場を採ることが多いという事実である。その場合，新共同訳は旧共同訳の訳文を引きずっていることがほとんどなのだが，例外的に旧共同訳の立場を踏襲しなかったⅡペトロ1:1の場合，キリストと神が同一視されていると判断した旧共同訳の立場のほうが近年支配的な立場になっているのは皮肉な感じがする。

どのような立場を採るにせよ，釈義上の意見が分かれる箇所において，一方の主張だけを根拠もなしに提示するのは，翻訳としてやはり問題があるのではないだろうか。そのような箇所においては，例えば岩波訳がしているように脚注を付するか，そうでなければせめて，新共同訳の立場を説明した注解書の発行が望まれよう[24]。

Ⅲ. 結論

以上見てきたように，新共同訳におけるユダ書とⅡペトロ書の訳文は，両文書の対応関係に対する配慮という観点からも，また釈義上の見解が分かれる箇所の翻訳という観点からも，非常に問題が多い。文脈上の必要がないにもかかわらず，同じ原語に異なる訳語を充てている場合が目立つし，釈義上の見解が分かれる箇所について十分な検討がなされているようにも見えない。

また，そのような問題をはらんでいる箇所では，新共同訳は旧共同訳の訳文に影響されている場合が多い。これはおそらく，旧共同訳からあまり期間をおかずに新共同訳を出版することになったという事情から来るものであろう。訳文に関する十分な検討をする時間的余裕がなかったせいで，結果として旧共同訳に引きずられることになったのだと思われる。加えて推測するに，福音書やパウロ書簡に比べると注目度が低いこれらの文書には，検討のための十分な時間が与えられなかったのではないだろうか。また，公同書簡を専門に扱う研究者の不足も無関係ではないであろう。次回の訳文改訂時には，ユダ書やⅡペトロ書の十分な検討が望まれる。

これらの文書に限ったことではないが，Ⅱで検証したような，釈義上の意見が分かれる箇所を翻訳する場合，どのような立場を採るにせよ，一方の主張だけを根拠なしに採用して訳文とするのは，やはり読者に不親切だし，翻訳としての誠実さにも欠けるように思う。岩波訳がすでに行なっているように，脚注を付して，どのような翻訳上の問題があるかを読者に提示するやり方がよいと思う。

（広島大学大学院総合科学研究科教授）

24 『新共同訳新約聖書略解』（日本キリスト教団出版局,2000年）は本来そのような内容であるべきだった。しかし，新共同訳の訳者とは異なる人間が注解を担当しているせいで（全ての文書についてそうなのかどうかはわからないが），逆に新共同訳の訳文を批判するような説明がなされていることも少なくない（ヤコブ書，Ⅰ・Ⅱペトロ書およびユダ書の注解を担当した筆者もそうしている）。